日本行動計量学会
会報
第44号
1988年6月15日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
(〒106) 東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

情報技術革新と人間行動

江川　清

昨今はやりのニューメディアの一つにパソコン通信というものがある。さらに、その一機能にチャット(ネットによっては別の名前もある)がある。

これは、通常の対面的な会話(おしゃべり)に当たるものを、ネットワークを介してリアルタイムで行おうというものである。そこでは、会話者同士の関係は原則として匿名的存在であり、また直接相手とは顔を会わさないで話し合えるという特性を持っている。だから、チャットでは初めて接する人に対しても、日常生活での会話にみられるような緊張感なしに、気楽にホンネで語り合うことができるといわれている(同好の士という親近感に支えられる面が多分に大きいとみられるが)。

しかるに、「最近、このチャットにおいてケンカが起こり始めている」という声がある。

考えてみると、チャットの持つ匿名性や非対面性は言語重視のコミュニケーションということである。しかし、通常の会話では、情報は言語だけで伝達されるのではなく、発話者の人となりや声の調子・表情等の非言語的行動、つまり言語以外の情報の持つ役割が大きいのである。この言語外情報の欠如が現行チャットでの発話の字義通りの解釈を生み、これが最悪の結果としてのケンカの誘因の一つともなるのであろう。

人間誰しも無益なケンカは好まぬものであるから、今後、チャットにおいても、非友好的な争いを避けるための知恵を求めて種々の努力がなされることであろう。

それがどのようなものであるかは即断し難いが、いくつかのことは考えられる。一つは、手書き文字または音声入出力装置などのハードによる解決であろう。

一方、人間は極めて柔軟な動物であるから、人間の方が機械に合わせるという途もなくはない。話しことばとの落差の大きい日本語の書きことばを用いてディスプレー上でおしゃべりを続けようとする限り、ことばそのものをある程度変えることもやむ得ないかも知れない。その場合は、恐らく、話しことばに近い形でのチャット独自の文体を模索することになろう。この点では、「チャットには丸文字が似合う」という別の声が一つのヒントかと目される。女学生専用の(?)丸文字は、字体そのものの是非は別として、これで記される文には感情を表現しうる新言文一致文体としての姿を看て取ることもできるからである。果たしてどのようになるか興味深いものである。

それはそれとして、近年の急速な技術革新に伴うメディアの多様化は、人間のコミュニケーションの手段と範囲の拡大を意味することで望ましいことではある。だが反面、技術革新の光の部分を追い求める余り、チャットの例にみられるように、人間行動への配慮が欠如することも少なくない。

柔構造としての人間にも、新しいモノへの適応には限度がある。特に、高齢化が進む今後の社会にあっては、機械に振り回され、取り残される人々がますます増加することは必定である。

情報の在り方をも含めて、人間主体のシステムとは何かといった基本的問題への提言を行うことが、これからの行動計量学の重要課題の一つとなろう。そのためにも、人間行動の普遍性と変化への順応性とを明らかにするための研究をより一層深めることが急務となろう。

えがわ・きよし
日本行動計量学会理事
国立国語研究所部長

新理事・監事選出される
——選挙の結果——

会則12条の規定により、次期理事（二十五名）及び監事（二名）の選挙が昭和六十二年暮れに行われた。選挙人及び被選挙人は、役員選出に関する細則10条にもとづき、昭和六十二年四月一日現在正会員で十月一日現在引き続き正会員であるもの一〇〇八名で、十二月十四日に投票を締切り（当日消印有効）、十二月二十三日に統計数理研究所において選挙管理委員会（星守委員長、米田正人、中村隆両委員）のもとで開票作業が行われた。有効投票人数一七二（有効投票率十七・一%）、無効投票人数九（期限切れ一、記名票二、消印なし四、日付なし二）であった。

当選者は次の通り（敬称略。五十音順）。

〈理事当選者（二十五名）〉

飽戸弘（東大・新聞研）　浅野長一郎（九大・理）　生澤雅夫（大阪市大・文）　池田央（立大・社会）　井上通敏（阪大・医）　岩坪秀一（大学入試センター）　印東太郎（カリフォルニア大）　江川清（国語研）↘

新理事長に肥田野直氏

四月九日に行われた理事当選人の会合で、肥田野直氏（放送大学）が新理事長に選出されました。任期は六十六年三月末までです。

↖大隅昇（統数研）　岡太彬訓（立大・社会）　丘本正（追手門大・経）　上笹恒（筑波大・哲思）　木下冨雄（京大・教養）　後藤昌司（塩野義製薬）　駒澤勉（統数研）　芝祐順（東大・教育）　竹内啓（東大・経済）　野元菊雄（国語研）　林知己夫（放送大）　肥田野直（放送大）　古川俊之（東大・医）　松原望（東大・教養）　水野欽司（統数研）　柳井晴夫（大学入試センター）　脇本和昌（岡山大・教養）

〈監事当選者（二名）〉

開原成充（東大・医）　宮原守男（虎の門法律事務所）

追加理事も決定される

細則15条の追加理事は左の五名。

熊田禎宣（東工大・社工）直井優（阪大・人間科学）　松村良之（北大・法）　宮原英夫（北里大・医）　吉村功（名大・工）

第8期理事会の会務分担決定

四月二十五日の理事会で決定した理事の役割分担は次の通りです。任期は昭和六十六年三月末まで。

〔編集委員長〕野元菊雄（国語研）〔和文誌編集幹事長〕古川俊之（東大・医）〔欧文誌編集幹事長〕宮原英夫（北里大・医）〔運営委員長〕水野欽司（統数研）〔刊行物委員長〕林知己夫（放送大学）〔大会担当〕池田央（立大・社）〔学術会議担当〕岩坪秀一（大学入試センター）〔庶務担当〕江川清（国語研）岩坪秀一（大学入試センター）岡太彬訓（立大・社）

会議記録

○理事会

時・昭和六十三年三月十九日
所・統計数理研究所
出席者・理事九名

1. 第16回大会の準備状況が柳井理事より報告された。
2. 日本学術会議（第14期）の学会登録を行ったことが水野理事より報告された。本学会は行動科学研連委員の推薦候補者に三隅二不二氏を、推薦人に水野欽司氏、岩男寿美子氏を、推薦人予備者に岡太彬訓氏を推すことが了承された。
3. 各種委員会報告が行われた。

○理事当選人の会合

時・昭和六十三年四月九日
所・統計数理研究所
出席者・理事当選人十二名
委任状提出者　六名

1. 肥田野直氏を理事長に選出した。任期は昭和六十三年四月一日から昭和六十六年三月三十一日までの三年間である。

○理事会

時・昭和六十三年四月二十五日
所・統計数理研究所
出席者・選挙された理事十名

1. 役員選出に関する細則15条にもとづき五名の理事の追加を決定した。〔上欄を参照〕

これで次期（第8期）の理事と監事は全てそろい、次回の理事会で会務分担が決まる予定。

○理事会

時・昭和六十三年四月二十五日
所・統計数理研究所
出席者・理事十三名

1. 理事の会務分担を決定した（上欄参照）。
2. 各種委員の承認を次回の理事会で行うこととした。
3. 各種委員会報告が行われた。

○運営委員会（第21回）
時　昭和六十三年二月二十四日
所　統計数理研究所
出席者　運営委員五名

1. 運営委員会の交代について
三月の理事交代に伴い運営委員会も交代する予定である旨の挨拶が委員長よりあった。

2. 講習会について
実現が遅れているが「マイコン統計学」の計画を引続き進める。

3. 月例シンポジウムについて
「新人類」、「言語情報処理」↘

↖のテーマの計画が進んでいる旨の報告があった。実施は四月以降になるが、大会前に実現する必要があることが確認された。
また、「パソコン統計パッケージ」をテーマにして計画を進めることにした。

4. その他
会員名簿の整備、会報紙面の刷新、賛助会員の増加方策、月例シンポジウムの非会員に対する旅費・謝礼問題、などについて議論した。

事務局交替移転のお知らせ

本号別記のように、本年度から役割分担が替わりました。これに伴い、事務局も岡太彬訓理事（立教大学）から江川清（国立国語研究所）に交替しました。
新事務局の住所は左記の通り。
〒115東京都北区西が丘三－九－十四　国立国語研究所内
日本行動計量学会事務局
☆未熟ゆえに、会員の皆様にご不便・ご迷惑をおかけすることが多々あるかと思いますが、よろしくお願いいたします。
☆なお、事務局への連絡は原則として郵便でお願いします。（江川）

第16回大会近づく

今年の大会は八月二十五日（木）から二十七日（土）まで千葉大学で開催されます。

会員数（63・5・26現在）
名誉会員　一名
正会員　一〇一五名
準会員　七〇名
賛助会員　二九社

☆前号の訂正（第43号2ページ）
〈会合記録〉の欄
誤　第48回月例シンポジウム
正　第47回月例シンポジウム

協賛する研究集会の情報

○計測自動制御学会（SICE）関西支部シンポジウム
「あいまい情報処理と知的システム制御」
時　昭和六十三年九月二十一日(水)と二十二日（木）の両日
所　大阪市立大学文化交流センター（大阪市北区梅田一丁目大阪駅前第三ビル16階）
参加費　会員（協賛学会員）　五千円
学生　二千五百円
☆講演論文集の代金を含む
申込み　氏名・所属学会・勤務先（その所在・部課・電話）・連絡先・送金方法・送金時期をB5判の白紙に記入し、左記まで。
送金　銀行振込、現金書留、小為替による。振込は九月十日限。
☆三和銀行堂島支店
普通口座　四六八一三三
計測自動制御学会関西支部
申込先　〒五三〇大阪市北区堂島2－1－39　大東ビル内
計測自動制御学会関西支部
電話〇六－三四五－七五九一
☆詳しくは直接お問合せを。

○第31回自動制御連合講演会
時　昭和六十三年十月二十五（火）、二十六（水）、二十七（木）日
所　なにわ会館（大阪市天王寺区石ケ辻町）
研究発表講演募集
既発表でもいいが、なるべく最近の研究で学術的なもの。
部門　①理論（最適制御・制御系設計・システム解析など）
②制御要素と機器（マイコンの応用・ロボット・アクチュエータ・パワーエレクトロニクス他）
③応用（工学・経済・教育などに対するモデリング、CAD、CAI、エキスパートなど）
④計測（計装システム、センサ、トランデューサ、信号処理他）
要領・時間は討論を含み15分。
・前刷原稿は一四八〇字2枚。
申込みと原稿締切日
昭和六十三年七月二十三日必着
申込金　三千円（申込み時に現金書留または郵便為替で）
問合せ、申込書・原稿用紙請求先
〒六〇六京都市左京区吉田河原町14番・近畿地方発明センタービル内　日本自動制御協会
電話〇七五－七五一－六四一三
FAX〇七五－七五一－六〇三七

追悼
ガットマン頌

林　知己夫

行動計量学ではおなじみのルイス・ガットマンが一九八七年十月二十五日、アメリカのミネアポリスで亡くなられた。享年七十一歳。イエルサレム・ポスト紙の記事によると「ガンとの長い闘いのあと」と書かれていた。私が最後にお会いしたのは一九八五年のINPIAの「データ・アナリシスとインフォーマティックス」の会で、ヴェルサイユの会議場においてであった。

彼の名を知り、その業績に目をみはってから四十年経過した。最初にお会いしたのは一九五六年と覚えている。

私はガットマンに大いに影響を受けていると思う。

私は研究を始めて以来、研究のタイプに相性を強く感じる性癖がある。確率論では、リヒァルト・フォン・ミーゼス——これは数学における確率論では反主流である——以外に気持ちに合う研究はなく、いまだにこれ一本槍である。私が確率というときはミーゼス流である。それから、ゲームの理論で知られるジョン・フォン・ノイマン。彼の透徹した考え方には胸のすくものがある。それに逐次検定論で知られるアブハム・ワルト。私は彼のコレクティフの業績を一層高く評価する。その統計的決定理論も捨て難い。さらにはフィッシャーである。彼の科学・統計学に対する態度を大いに評価するのであるが、出来あがった理屈には首をかしげたくなっている。

これらは大先達であるが、近くは、ガットマン、探索的データ解析のトゥキィ、フランス流データ解析のベンゼクリであるが、とりわけ抜群なのがガットマンである。

畏友・池内一君（惜しくも故人になってしまった）が、昭和二十三年ごろ、リッカート・スケールはだめだが、ガットマンという人のスケール理論は筋が通っていると言って持ってきた。ちょうど私が仮釈法の研究を始め、リッカート・スケールに疑問を持ち、今で言うⅡ類のはしりのようなことを手がけていた時である。一読するに、これはすごい考え方であると感銘を受けたのを覚えている。考え方は、コンテント、インテンシティをふくめ素晴しく、データ解析の本質を衝き、我々の考えていた「統計数理」の本質にぴったりしていた。池内君といろいろこの方面の研究を一緒にやり、実際のデータをとってもみた。ただ、データにあてはめてみると、どれもうまくスケールが日本では出来ない。アメリカではうまく行くのかどうか、何かの折に確かめてみたかった。

一方、一対比較法のまさに「凄い」論文にも出会った。「これある哉」と思ったものである。考え方は仮釈法でやっていた「数量化」のものと極めて類似していたのである。「数量はものそのものに内在するものではない。我々が目的を科学的に達成するために、我々が与える道具である」という数量化の根本思想が確立してきた。ガットマンの業績は大変な刺激になった。

そのうち『測定と予測』という本で、ガットマン・スケールの数理的解明を試みているものに出会った。その演繹的な形は快刀乱麻を断つ感じで、ガットマン・スケールの持つ内的意義を次々と呈示しているのであったが、それでもなお、実際のデータとの対応という点で何か「すきま風」のある感を免れなかった。すくなくとも私は「データの男」だったからである。一九五六年イスラエルのガットマン研究所（彼は不在だった）でガットマン・スケールの現場を見たが、やはりうまく行っている例は少なかったことが解った。

因子分析法が妥当するような質的データの類型化の理論も印象に残る。一九六八年のＭＤＡに関する彼のＳＳＡは、ＭＤＡを実際に解く上で一番筋の通ったものだと思っているが、その第一近似値に数量化Ⅳ類が使われていて、はからずも、数量化Ⅳ類がＭＤＡの原型になっていることが解ってきた。データに忠実で、これと取り組んで情報をつかみ出そうと苦心する者は、同工の方法にたどりつくものであることを知ったのである。

彼とはアメリカで初めて会って以来、一九七〇年日本に招聘して親しく話をし、以後しばしば意見を交換しつつ刺激を受けた。もっと生きていて世に貢献してほしかった。「巨星墜つ」の感が深く、惜しいの一言につきる。

（一九八八年四月二十八日記）